

# 日中の比較によるビリーフ・システムと学校適応に関する研究

吉 沅 洪\*

## 要 約

本研究では、日本と中国の高校生、大学生のビリーフ・システムの文化差、および学校適応に及ぼす影響について検討した。その結果、日本人学生より中国人学生の方が強いイラショナル・ビリーフを持っていることが明らかになった。これは、中国の一人っ子政策、および学問、倫理観を重視する儒教が及ぼした結果と考えられる。また、日中に共通して、イラショナル・ビリーフが強いと外的適応をしているが、情緒は不安定である結果が得られた。一方、中国人学生の方が日本人学生に比べ得点が高く、適応感が高い結果が得られた。これは日本人が「粹」に拘り、中国人は「面子」に拘ることと関連があると思われる。

キーワード：ビリーフ・システム、学校適応、異文化

## I はじめに

世界がグローバルになるにつれて、来日する外国人留学生、児童、生徒数が年々増えてきている。日本の文部省が発表した平成10年5月1日現在の「留学生受け入れの概況」によると、留学生総数は51,298人であり、その中に中国本土からの留学生は22,810人、44.4%でトップを占めている。留学生急増に伴い、在日外国人留学生の適応問題が注目されるようになってきた。

困難な課題を抱えている留学生の異文化適応には多くの問題が存在しているが、その適応プロセスにおいて避けられないカルチャー・ショックは次の三種に大別できる。①他文化の論理的理解に失敗したときに受けるショック、②自分を理解させることについて失敗したときに受けるショック、③

それまで正常だと考えてきた規範の妥当性に疑いを抱くような事態、つまり既知の体系の崩壊に出会った時に受けるショックである（長島、1973）。従って異文化適応とは、まず自他の違いに気づき、そしてその違いを受け入れ、さらに自他を融合していくプロセスである。

一方、論理療法（Rational Emotion Behavior Therapy）はAlbert Ellisによって創始され、個人の問題を最小限にするために、認知、感情、行動面への積極的な介入を試みる認知行動療法である。論理療法では、結果である不適応行動、神経症的行動の原因は個人の受け取り方（ビリーフ・システム、Belief System）にあると考え、それらの非論理的・非合理的な信条で不適応行動を引き起こす受け取り方をイラショナル・ビリーフ（Irrational Belief、以下IrBと略す）という。論理療法の焦点は、個人のイラショナル・ビリーフを発見し、修正し、論理的な考え方ができるように援

\* 広島市立大学国際学部

助することである。つまり、論理療法では、個人の考えを変えれば自己変革につながり、悩みを軽減するのに役立つと考えるのである。

また日本においては、学校不適応に関する研究が盛んに行われており、1995年度から文部省はスクールカウンセラー活用調査研究委託事業として学校教育現場へ心理臨床を導入するに至っている。学校不適応は、理論的には、学校の生活時間や生活の決まりへの不適応、学習不適応、友人や教師との人間関係の上での不適応などに分けることができる。また、心理臨床的には、これらの結果、生じる問題行動として不登校、緘黙、いじめ、校内暴力などに分別できるとされる（佐藤，1989）。

## II 目 的

本研究では、これまでの研究の流れの一つである論理療法と結びつけ、日本人高校生、大学生と中国人高校生、大学生が持っているビリーフ・システムの特徴、および学校適応に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。次に、本研究結果が日本に在駐する中国人留学生の異文化適応を果たすのに有効となるための基礎資料として今後の検討事項の一助としたい。

## III 研究方法

### 1. 質問紙の構成と尺度項目の選定

質問紙はフェースシート（性別、年齢の記述を求める）と以下の2つの尺度より構成した。

#### ①イラショナル・ビリーフ尺度40項目

吉（1999）はEllisが提唱する3種類のIrB、つまりIrBが向けられる対象によって、自己・他者・状況に関する3種類があることを念頭に置き、中国人留学生用のイラショナル・ビリーフ・テスト50項目（中国版）を作成した。自己に関するIrBの項

目は、「私は」という主語で始めた。他者に関するIrBの項目は、「友人は」などの主語で始めた。状況に関するIrBの項目は、出来事を表す言葉を主語として用いた。また、ビリーフのみを測定し、感情や、行動は含まないように、各項目は「ねばならない」（中国語版に「必須」）や「べきである」（中国語版に「應該」）で終わるようにした。さらに、「いつも」や「決して」や「どんなときでも」などを付け加えることによって、論理療法が指している強い非論理的な思いこみを表現することを図った。一方、中国人留学生として、初めて日本という異国、異文化に直面するときに持つ可能性のある非論理的な思いこみの項目を削除した。例えば、「周りは日本語で不自由をしている自分にいつも親切にしてくれるべきだ」や、「私は日本で生活にはやく慣れなければならない」や、「私は留学の成果を上げなければならない」や、「私は日本で生活していく上で、国籍によって差別されるべきではない」などの10項目である。

イラショナル・ビリーフ尺度項目の右側に、質問項目のビリーフ内容が、達成されなかった場合に起こる否定的な感情の喚起度を問う質問を付け加えた。

#### ②適応感尺度32項目

環境に対する適応あるいは適応的行動の側面と、自己の内面的あるいは人格的適応感という2側面で適応を捉えることが重要である。鈴木（1995）は「外的（環境への）適応」は、現代社会の青年の状況を巧みに処理する能力を反映すると考え、「内的適応」は自己の内面的な自我感情や情緒、自己評価であることを考慮して適応尺度の開発を試みた。本研究は、鈴木が外的適応を行動に対する認知という側面から、内的適応を充実感、疎外感を中心に検討を行って作成した適応尺度を用いるが、日本の高校生・大学生、及び中国の高校生・大学生に適した表現にして適応感尺度とした。な

るべく青年をとりまく環境、自己の内面的な動きなどに対する彼らの主観的評価・情緒的反応の形でとらえたいと意図したことから、尺度名は「適応感尺度」とした。

①および②の計72項目はすべて6段階評定で実施した。日本語で作成した質問紙を中国語に翻訳し、バックトランスレーションによりもとの日本語版との表現の違いや翻訳ミスのチェックを行った。

## 2. 調査の実施

調査時期：平成8年9月から平成8年12月まで約4ヶ月間に実施した。

調査対象：北海道、愛知県、神奈川県の日  
本人高校生（平均年齢16.1歳、男子264名、  
女子305名）計569名。東京都、神奈川県、  
愛知県、京都府の日本人大学生（平均年齢  
19.7歳、男子154名、女子202名）計356名。  
北京市、西安市、蘇州市の中国人高校生  
（平均年齢16.7歳、男子259名、女子225  
名）計484名。北京市、西安市、南京市、  
蘇州市の中国人大学生（平均年齢20.5歳、  
男子232名、女子219名）計451名。なお、  
調査は無記名で行った。今回の分析では、  
高校生、大学生合計1860名（男子909名、  
女子951名）のデータを用いた。統計処理  
は統計パッケージソフトSASによって行  
われた。

## IV 結果及び考察

### 1. 尺度の検討

まず、日本人高校生・大学生、中国人高  
校生・大学生におけるイラショナル・ビリー  
ーフ・テストの得点を因子分析した結果、  
因子負荷量から見て不適切な項目を削除す  
ることによって尺度の確定を行った。日本  
人高校生は1項目が削除され、39項目を使  
用した。日本人大学生の場合は削除項目は  
なし、40項目のままで使われた。中国人高  
校生は10項目が削除され、30項目を使用し  
た。中国人大学生は8項目が削除され、32

項目を使用した。

次に、日本人高校生・大学生、中国人高  
校生・大学生における適応感尺度の得点を  
因子分析した結果、因子負荷量から見て不  
適切な項目を削除することによって尺度の  
確定を行った。日本人高校生は4項目が削  
除され、28項目を使用した。日本人大学生  
は2項目が削除され、30項目を使用した。  
中国人高校生と大学生はともに4項目が削  
除され、28項目を使用した。

さらに、イラショナル・ビリーフ・テス  
ト全体及び因子ごとの、日本人学生、中国  
人学生をそれぞれに、内的整合性を検討す  
るために $\alpha$ 係数を求めた。Table 1内に示  
したとおり、日本人高校生、大学生はそれぞ  
れ.82～.83、.81～.83であり、中国人高校  
生・大学生はそれぞれ.75～.78、.76～.79  
であった。適応感尺度全体及び因子ごとの、

Table 1 イラショナル・ビリーフ・テストの因子分析結果及び信頼性係数

IrB	日本人 高校生 0.82	日本人 大学生 0.81	中国人 高校生 0.75	中国人 大学生 0.76
第1因子	自己 0.83	他者・状況 0.81	他者・状況 0.78	他者・状況 0.77
第2因子	他者・状況 0.83	自己 0.82	倫理・自己 理想 0.77	他からの 期待 0.79
第3因子	倫理観 0.83	倫理観 0.83	他からの 期待 0.77	倫理・自己 理想 0.78
累積寄与率	44.2%	39.3%	32.6%	35.2%

(\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .1$ , ns有意差なし)

Table 2 適応尺度の因子分析結果及び信頼性係数

IrB	日本人 高校生 0.86	日本人 大学生 0.85	中国人 高校生 0.75	中国人 大学生 0.74
第1因子	情緒安定 0.89	情緒安定 0.87	学校に対する 肯定的態度・学業 0.79	情緒安定 0.79
第2因子	自己肯定感 0.86	自己肯定感 0.85	情緒安定 0.76	自己肯定感 0.76
第3因子	学校に対する 肯定的態度・学業 0.85	学校に対する 肯定的態度・学業 0.84	自己肯定感 0.74	学校に対する 肯定的態度・学業 0.76
累積寄与率	41.3%	41.0%	34.2%	38.5%

(\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .1$ , ns有意差なし)

日本人学生、中国人学生をそれぞれに、内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を求めた。Table 2内に示したとおり、日本人高校生・大学生はそれぞれ.85～.89、.84～.87であり、中国人高校生・大学生はともに.74～.79であった。

## 2. IrB尺度と適応感尺度の因子分析

IrB尺度について、共通性1.0、固有値1.0以上という基準で因子抽出を打ち切る主因子法を用い、日本人高校生・大学生、中国人高校生・大学生を対象別に因子分析を行った。Varimax回転後、固有値の変動状況、各学年段階に共通して統計的な意味、因子の解釈のしやすさなどを考慮して、理論的観点から検討した結果、本調査ではそれぞれ3因子が抽出された。因子分析の累積寄与率は32.6%～44.2%であった。

日本人高校生と大学生の3因子構造、そして中国人高校生と大学生の3因子構造はほぼ同様であった。日本人学生は「他者・状況」、「自己」、「倫理観」に関するIrBの3因子が得られた。この因子構造は吉(1999)が在日中国人留学生を対象に行った調査結果と同様である。つまり、「倫理観」は「自己」、「他者」、「状況」に関する項目と考えられたものから倫理に関連するビリーフが独立した形となったのである。また、中国人学生は「他者・状況」、「他からの期待」、「倫理・自己理想」に関するIrBの3因子が得られた。この因子構造については、「倫理観」は「自己」、「他者」、「状況」に関する項目と考えられたものから倫理に関連するビリーフがまとめられ、「自己理想」と一緒になって因子を構成した。この結果を松村(1991)の報告する因子構造と照らし合わせてみると、「自己理想・倫理観」は松村の「自己期待」、「倫理的非難」と、「他者・状況」は松村の「依存」、「協調主義」と対応することができる。これらの結果から、本研究で用いるイラショナル・ビリーフ・テストはEllisの提

唱する「自己」、「他者」、「状況」の3種類のイラショナル・ビリーフ(石隈, 1989)の発展型としてとらえることができた。これらのことから、このテストの構成概念的妥当性が支持されたと言える。

適応感尺度については、実施された32項目に対してIrB尺度と同様な主因子法を用いて因子分析を行った。Varimax回転後、固有値の変動状況、各学年段階に共通して統計的な意味などを考慮して、本調査ではそれぞれ3因子が抽出された。因子分析の累積寄与率は34.2%～41.3%であった。日本人高校生、大学生も中国人高校生、大学生も同様な3因子構造が得られた。第1因子は「私は最近寂しくなることがよくある」、「私は最近感情の変化が激しい」、「私は小さなことでもすぐカットなる」などの反転項目からなり、「情緒安定」因子と命名された。第2因子は「私は自分の生き方に自信が持てる」、「自分の生き方は自分で決めることができる」などの項目からなり、「自己肯定感」因子と命名された。第3因子は「私はこの学校が大変好きである」、「私は授業に集中することができる」のような学校に対する感情、学業に対する考えなどの項目からなり、「学校肯定感・学業」因子と命名された。「情緒安定」、「自己肯定感」は、内的適応項目であり、「学校に対する肯定的態度」、「学業」は外的適応項目である。本適応感尺度により、適応の内的、外的側面が検討されたのである。

## 3. 達成されなかった場合の否定的な感情の喚起

イラショナル・ビリーフが達成されなかった場合の否定的感情の喚起度への回答は、最も強く感じる時を6、全く感じない場合を1として、順次数値化した。従って、本尺度は得点が高いほど、そのビリーフが達成されなかった場合の否定的感情が強く喚起されることを示す。

イラショナル・ビリーフ・テストと否定

的な感情の喚起度の相関分析を行った結果、日本人学生、および中国人学生とも、尺度全体間に有意な正の相関が得られた。日本人高校生、大学生においては、それぞれ  $r=.754$  ( $p<.01$ ),  $r=.721$  ( $p<.01$ ) と高い相関であった。また、中国人高校生、大学生においては、それぞれ  $r=.769$  ( $p<.01$ ),  $r=.781$  ( $p<.01$ ) と同じく高い相関が得られた。イラショナル・ビリーフは、結果として不安、怒りや抑うつなどの否定的な感情を喚起させるビリーフであることがこの結果によって確認できたと考えられる。さらに、これらのビリーフは、否定的な感情を誘発するイラショナル・ビリーフ・テストとして捉えることができ、本調査に用いられたイラショナル・ビリーフ・テストの妥当性が確認できたのである。

#### 4. 日本人高校生、大学生のIrBと適応の関連

日本人高校生についてみると、イラショナル・ビリーフ・テストと適応感尺度の相関分析を行った結果、尺度全体間に有意な相関が得られなかった (Table 3)。これは適応感尺度とイラショナル・ビリーフ・テストの各因子間での相関が正の相関と負の相関が混在しているため、全体として無相関となったのである。IrBの各因子は情緒安定因子との間には低い負の相関が得られた ( $r=-.287$ ,  $p<.01$ )。つまり、IrBが強いと、情緒的に不安定になると言える。また、IrBの各因子は、学校に対する肯定的な態度・学業因子との間には低い正の相

関が得られた ( $r=.290$ ,  $p<.01$ )。すなわち、IrBが強いと、自己肯定感が高く、学業に対しても適応が高いと言える。

そして、日本人大学生について述べる。日本人高校生の結果と似ているように、イラショナル・ビリーフ・テストと適応感尺度との間においては、尺度全体に有意な相関が得られなかった (Table 4)。これも尺度の各因子間での相関が正の相関と負の相関が混在しているため、全体として無相関となったのである。IrBの各因子は情緒安定因子との間には低い負の相関が得られた ( $r=-.231$ ,  $p<.01$ )。

Table 4 日本人大学生のイラショナル・ビリーフと適応の関連

IrB	適 応 尺 度			
	情緒安定	自己肯定感	学校肯定・学業	合計点
他者・状況	-0.163**	0.134*	0.133*	0.012 ns
自己	-0.265**	-0.056 ns	0.173**	-0.068 ns
倫理観	-0.118*	0.052 ns	0.087+	-0.015 ns
合計点	-0.231**	0.105*	0.166*	-0.029 ns

(\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

#### 5. 中国人高校生、大学生のIrBと適応の関連

まず、中国人高校生についてみると、イラショナル・ビリーフ・テストと適応感尺度の相関分析を行った結果、尺度全体間に有意な正の相関が得られた (Table 5)。IrBの各因子は情緒安定因子との間には無相関であり、自己肯定感、学校肯定感・学業因子との間には低い正の相関が得られた ( $r=.228$ ,  $r=.300$ ,  $p<.01$ )。つまり、IrB

Table 3 日本人高校生のイラショナル・ビリーフと適応の関連

IrB	適 応 尺 度			
	情緒安定	自己肯定感	学校肯定・学業	合計点
他者・状況	-0.266**	0.190**	0.219**	0.001 ns
自己	-0.238**	0.087*	0.343**	0.001 ns
倫理観	-0.242**	0.057 ns	0.177**	-0.068 ns
合計点	-0.287**	0.137**	0.290**	-0.020 ns

(\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

Table 5 中国人高校生のイラショナル・ビリーフと適応の関連

IrB	適 応 尺 度			
	情緒安定	自己肯定感	学校肯定・学業	合計点
他者・状況	-0.026 ns	0.189**	0.252**	0.132*
他からの期待	-0.090*	0.187**	0.211**	0.059 ns
倫理・自己理想	0.123+	0.142*	0.298**	0.232**
合計点	-0.046 ns	0.228**	0.300**	0.138*

(\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

が強いと、自己肯定感が高く、学業に対しても適応が高いと言える。

次に、中国人大学生について述べる。中国人高校生の結果と似ているように、イラショナル・ビリーフ・テストと適応感尺度の相関分析を行った結果、尺度全体の間に有意な正の相関が得られ、そして情緒安定因子との間では無相関である (Table 6)。だが、IrBの各因子は自己肯定感因子、学校肯定感・学業因子とは、低い正の相関が得られた ( $r=.173$ ,  $r=.203$ ,  $p<.01$ )。

Table 6 中国人大学生のイラショナル・ビリーフと適応の関連

IrB	適 応 尺 度			
	情緒安定	自己肯定感	学校肯定・学業	合計点
他者・状況	0.031 ns	0.228**	0.267**	0.195**
他からの期待	-0.146**	0.069 ns	0.076 ns	-0.027 ns
倫理・自己理想	0.003 ns	0.148**	0.183**	0.120*
合計点	-0.065 ns	0.173**	0.203**	0.100*

(\* \*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

この様に、日本人高校生と日本人大学生、そして中国人高校生と中国人大学生では、IrB全体、および各因子と適応全体、および各因子との関係においてほぼ一致していた。

また、イラショナル・ビリーフ・テストの3因子が、適応感尺度の各因子をどの程度予測しうるかを調べるため、3因子各々の得点を説明変数、適応感尺度の各因子の得点を目的変数として日本人高校生、大学生、および中国人高校生、大学生にそれぞれ重回帰分析を行った (Table 7, Table 8)。

Table 7 日本人学生のイラショナル・ビリーフ・テストの3因子を説明変数、適応尺度3因子を目的変数とする重回帰分析(標準偏回帰係数)

		他者・状況	自 己	倫理観	説明率 <sup>(R<sup>2</sup>)</sup>
中国人高校生	情緒安定	-.117+	-.153+	-.093+	.083
	自己肯定	-.022*	.271+	-.133+	.050
	学校肯定・学業	.405+	.032+	-.033+	.118
中国人大学生	情緒安定	-.350+	.008+	-.005+	.070
	自己肯定	-.040+	.171+	-.014+	.020
	学校肯定・学業	.141+	.039+	.002+	.031

(\* \*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

Table 8 中国人大学生のイラショナル・ビリーフ・テストの3因子を説明変数、適応尺度3因子を目的変数とする重回帰分析(標準偏回帰係数)

	他者・状況	他からの期待	倫理・自己理想	説明率 <sup>(R<sup>2</sup>)</sup>	
中国人高校生	情緒安定	.155+	.130+	.038*	.055
	自己肯定	.162+	.080*	.183*	.115
	学校肯定・学業	-.064+	-.206+	.219+	.040
中国人大学生	情緒安定	.149+	-.284+	.067+	.037
	自己肯定	.241+	-.081+	.076+	.060
	学校肯定・学業	.268+	-.102+	.097*	.085

(\* \*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , +  $p<.1$ , ns有意差なし)

その結果、日本人高校生は他者・状況に関するイラショナル・ビリーフは学校肯定感、学業に対して影響力を持つことが明らかになった。つまり、他者・状況に関するイラショナル・ビリーフが強いと、学校肯定感が高く、学業に対しても適応が高い結果が得られた。日本人大学生においては、他者・状況に関するイラショナル・ビリーフは情緒の安定に影響力を持つことが明らかになった。つまり、他者・状況に関するイラショナル・ビリーフが強いと、情緒が不安定になる結果が得られたのである。

中国人高校生の場合は、倫理・自己理想に関するイラショナル・ビリーフは学校肯定感、学業に対して影響を及ぼしている結果が得られた。つまり、倫理・自己理想に関するイラショナル・ビリーフが強いと、学校肯定感が高く、学業に対しても適応が高いことが明らかになった。中国人大学生においては、他者・状況に関するイラショナル・ビリーフが学校肯定感・学業に対して影響を及ぼしていることが明らかになった。すなわち、他者・状況に関するイラショナル・ビリーフが強いと、学校肯定感が強く、学業に対して適応している結果が得られたのである。

以上の結果をまとめると、つまりイラショナル・ビリーフが強いと、外的適応をしていた。しかしながら、一方で、イラショナル・ビリーフが強いと、情緒は不安定であった。適応を外的適応のみではなく、内

的適応も併せた2側面を捉えることで、イラショナル・ピリーフを持っていることが外面的行動に対する認知では適応しているが、内的適応としての感情面では不安定であることが示唆された。すなわち、イラショナル・ピリーフが強く、外的に適応していても、内的不適応感を抱く可能性が示唆されたといえる。Ellisは自らの臨床経験から、ピリーフシステムと感情の関係について着目し、論理療法の理論を導き出した。今回の研究結果は、イラショナル・ピリーフと不適切な感情との関係が、Ellisの主張と一致する。

また、半田(1994)の高校生を対象とした無気力の研究において、イラショナル・ピリーフと否定的認知とは負の相関であるのに対して、否定的感情(「ひどく失望することがある」などの質問項目から構成される因子)とは正の相関であった。このことは、否定的認知は自己肯定感と認知的側面に焦点が置かれている点において共通しており、否定的感情は情緒安定と感情的側面に焦点が置かれている点において共通していると考えられる。従って、無気力感の研究におけるイラショナル・ピリーフが強いと肯定的認知をすると同時に否定的感情を持つという結果は、本研究で得られたイラショナル・ピリーフが強いと自己肯定感が高いが、一方で情緒的には不安定であ

るという結果と一致するとと言える。

しかし、ピリーフは文化的に是認されている理想や規範であっても、それが過度に自己に行動を要求し、自己がそのピリーフに対して絶対に従わなくてはならないと感じている場合、情緒面で不適応を起こす可能性があると考えられる。

## 6. IrB, 適応感における日中比較

日本人高校生、大学生、および中国人高校生、大学生を対象に、学校段階別、男女性別、日中という国別を3要因とする分散分析を行った(Table 9)。

イラショナル・ピリーフ・テスト全体では日中差( $F=295.06$ ,  $p<.05$ )が見られたが、学校段階差、性差は見られなかった。日中差が見られたイラショナル・ピリーフ・テストでは、中国人学生の方が日本人学生に比べ得点が高い結果となった。

Ho(1992)は「中国人(台湾、中国本土)大学生の(子どもの)養育態度に対する認知、および認知とイラショナル・ピリーフとの関連」について、研究を行った。その研究によると、台湾出身者のイラショナル・ピリーフは、本土出身者のより有意に低いことを示していた( $p<.001$ )。また、鈴木(1997)は、児童生徒の学校ストレスについて日韓比較調査を行った結果、韓国の生徒は日本に比べて、心理的ストレ

Table 9 イラショナル・ピリーフ・テスト、および適応感得点の平均、標準偏差および分散分析

									分散分析			
	日本人高校生		日本人大学生		中国人高校生		中国人大学生		学校段階	国別	性差	交互作用
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子				
イラショナル・ピリーフ・テスト全体	3.51 (0.91)	3.57 (0.72)	3.58 (0.70)	3.65 (0.67)	4.14 (0.54)	4.25 (0.49)	4.08 (0.61)	4.02 (0.54)	0.78 ns	295.06**	1.98 ns	2.05 ns
適応全体得点	3.69 (0.60)	3.62 (0.64)	3.87 (0.63)	3.96 (0.64)	4.36 (0.53)	4.49 (0.53)	4.17 (0.55)	4.17 (0.59)	0.08 ns	325.64**	1.26 ns	5.21*
「情緒安定」得点	3.76 (1.07)	3.49 (0.98)	3.82 (1.09)	3.84 (1.05)	3.91 (0.86)	4.13 (0.84)	4.00 (0.90)	4.13 (0.84)	7.65**	48.97**	0.33 ns	4.33*
「自己肯定」得点	4.00 (0.82)	4.06 (0.78)	4.24 (0.80)	4.34 (0.76)	4.97 (0.72)	4.93 (0.63)	4.82 (0.66)	4.69 (0.73)	0.87 ns	383.72**	0.02 ns	0.77 ns
「学校肯定・学業」得点	3.03 (1.10)	3.08 (1.08)	3.63 (0.77)	3.81 (0.78)	4.31 (0.68)	4.40 (0.65)	3.88 (0.66)	3.81 (0.67)	3.82+	318.78**	2.47 ns	3.47+

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , + $p<.1$ , ns有意差なし)

ス状態や学校不適応が高い傾向にあることが明らかになった。また、韓国の生徒は日本の生徒に比べて不合理的信念、つまりイラショナル・ビリーフが高い傾向にあること、そしてイラショナル・ビリーフが心理的ストレス状態や学校不適応感に強い影響を及ぼしていることが調査結果として得られたのである。

本研究の結果は、Hoと鈴木の研究結果と一致する部分があり、現代中国社会の特徴を端的に表すものであると思われる。1978年中国政府が一人っ子政策を打ち出して以来、現在一人っ子は98%にも上ると言われている。つまり、本研究の調査対象となった高校生、大学生のほとんどが一人っ子である。張（1997）が行った日中の比較研究によると、中国においては一人っ子に与えようとする愛情は過多であるため、日本人の子どもと比べ、中国の子どもの方がわがままで、依存性と劣等感が強く、自制力の低い性格が形成される。

また、儒教思想は紀元前2世紀に中国の正統思想として地位を確立されて以来、儒教の思想体系、道德規準、行為規範は一般的な社会生活における倫理としての機能を持ち、中国社会の各方面に浸透し、中国人の思考様式と行動様式に影響してきた（高田，1994）。さらに、一人っ子らは一家の望みを一身に背負い、厳しい競争の中で生き残るために、彼らは常に自ら努力し続けることが要求されている。

従って、中国人学生は、他者、状況、倫理観、および自己などに関するイラショナル・ビリーフが日本人より強い結果が得られたのではないかと考えられる。

一方、適応感尺度全体（ $F=325.64$ ,  $p<.01$ ）、および3因子においても日中差が見られた。つまり、中国人学生の方が日本人学生に比べ得点が高く、適応感が高い結果が得られた。因子毎に詳しく見ていくと、情緒安定因子においては、性差が見られなかったが、学校段階差（ $F=7.65$ ,  $p<.01$ ）、

日中差（ $F=48.97$ ,  $p<.01$ ）が見られたのである。つまり、大学生の方が高校生に比べ、中国人学生の方が日本人学生に比べ得点が高く、情緒が安定している結果が得られた。また、自己肯定感因子、学校肯定感・学業因子においても、日中差が見られた（ $F=383.72$ ,  $p<.01$ ）。つまり、中国人学生の方が日本人学生より得点が高く、自己肯定感、学校肯定感が高く、学業に対して適応している結果が得られたのである。

日本人と中国人とでは、対人関係の持ち方に違いがあり、日本人は「粹」に、そして中国人は「面子」に拘る（吉・酒木，1999）。日本人の伝統的な「人並み」「一人前」という子どもへの養育態度も「粹」の考え方と関連しているように思われる。中国人学生は常に熾烈な競争に直面させられているのと比べ、日本人学生にとっては、周りの環境に馴染むかが主な適応課題である。従って、日本人学生のこのようなのんびりとした就学態度が許容されている。中国人は対人関係においては、あくまで「面子」を重要視しているため、総じて明るく振舞っているが、容易に感情を外に向かって発散させることは困難である。つまり、中国人は感情の変化、不安になる、よく眠れないといった情緒の不安定として表出するというよりは、心身症という形で表しているのではないかとと思われる。

## V 結 論

日本と中国の高校生、大学生のビリーフ・システムの文化差、および学校適応に及ぼす影響について検討した結果は以下の通りである。

①日本人学生より中国人学生の方が強いイラショナル・ビリーフを持っている。

②日中に共通して、イラショナル・ビリーフが強いと外的適応をしているが、情緒は不安定である。

③中国人学生の方が日本人学生に比べ得



点が高く、適応感が高い。

## VI 今後の課題

まず、高校生と大学生に共通した尺度を用いての量的比較の限界が挙げられる。今回は、高校、大学に共通する尺度を使用し、量的にその比較を試みたものである。イラショナル・ビリーフ・テストにおいては、日本人高校生と日本人大学生、中国人高校生と中国人大学生、そして適応感尺度においては、すべての被験者はほぼ同一の因子構造と見なして分析を行ったことに問題があったと考えられる。高校と大学、日本人と中国人の因子構造の質的な違いについては、今後の課題にしたい。

次に、イラショナル・ビリーフ・テストについては、今回達成できなかった場合の感情喚起をビリーフと併せて調査したが、不適切な感情の質的な相違にも着目する必要があると考えられた。また、イラショナル・ビリーフ・テストの項目の言葉遣いに関しては、絶対的表現である英語のmust, shouldを「べきである」「なければならない」の訳を使用した尺度を調査に用いた。主語を明確にしたことによって「対象への志向性」が含まれた文章記述を試みたが、絶対的なビリーフの中でも「志向性をもたないビリーフ」、すなわち問題回避や、無責任などについては検討されなかったのである。しかし、これらの問題は不適応の中で深刻な問題である。そのため、より包括的な「絶対的must」を検討する必要があると示唆された。その際には、言語表現として「断定」、例えば「である」「絶対そうだ」「～に決まっている」などの表現を使用したビリーフを考慮に入れたさらなる検討が必要である。

さらに、適応感尺度については、本研究は内的適応、外的適応という2側面から検討することを試みた。中国人の特有な「面子」に拘る対人関係の持ち方を念頭に置き、

情緒の安定、自己肯定感などの精神面からのみならず身体面も考慮に入れて検討していく必要があると考えられる。

## 付 記

本論文は、日本カウンセリング学会第30回大会で発表したものに加筆したものである。

1996年度京都文教大学人間学研究所海外研究助成での調査にあたって、ご協力を頂きました、日本及び中国の学校、何よりもそこに所属する学生に深く感謝を申し上げます。

## 引用文献

- 張 美蓉 1997 中国の子どもの性格と親の養育態度の関連について－日本との比較研究を通して－ 小児の精神と神経, 37(4), 301-310.
- 半田一郎 1994 高校生の無気力の認知的要因－原因帰属とイラショナル・ビリーフについて－ 平成5年度筑波大学教育研究科修士論文(未公開)
- Ho, Chang-chu P. 1992 Chinese(Taiwan, Mainland China) college students' perceived childrearing attitudes and their relationship to irrational belief. Dissertation Abstracts International, 52(9-A), 3183.
- 石隈利紀 1989 論理療法の哲学・理論・技法 日本学生相談学会編 論理療法にまなぶ 川島書店 pp.31-59.
- 吉 沅洪 1999 中国人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響 学生相談研究, 20, 143-152.
- 吉 沅洪・酒木 保 1999 日中のことばから捉えた文化と神経症「人間・文化・心」京都文教大学人間学部研究報告第2集, 69-81.
- 松村千賀子 1991 日本語版Irrational Belief Test (JIBT) に関する研究 心理学研究, 62, 106-113.
- 長島信弘 1973 カルチュア・ショック 教育と医学 慶応通信
- 佐藤修策 1989 適応障害の心理臨床 臨床心理学大系10 金子書房
- 鈴木未央 1995 イラショナル・ビリーフと適応の関係の発達の検討 平成6年度筑波大学教育研究科修士論文(未公開)
- 鈴木伸一・洪光植・嶋田洋徳他 1997 児童生徒の学校ストレスの日韓比較(3) 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 230.
- 高田 淳 1994 中国の近代と儒教 紀伊国屋書店

**ABSTRACT**

## A Cross-cultural Study on Belief System and School Adjustment by a Comparison Between Japan and China

Yuanhong JI

In the present study, we investigated the culture difference of belief system between Japan and China's high school and university students and its influence upon school adjustment. We make clear a fact from the results that the irrational belief of Chinese students is stronger than that of Japanese students. This can be considered due to China's one-child policy and the Confucianism, which stresses knowledge and ethics. We come to a conclusion, which is common in both Japan and China, that the strong irrational belief leads to strong external adjustment ability but causes emotional instability. Moreover, in comparison with Japanese students, Chinese students have a higher scores in adjustment scale. The result can be thought to be related to the fact that Japanese stick to 'waku' while Chinese stick to 'Manzi'.

**Keywords :** Belief System, School Adjustment, Cross-cultural